

特集「京都府立医科大学雑誌通刊 1000 号発行記念」

通刊 1000 号の発行に際して

京都府立医科大学雑誌編集委員長 高松哲郎

このたび本誌は通刊 1000 号となり、ここに記念号を出版することとなった。

さて、最初に申しあげておかなければならないのは、通刊 1000 号とはいつから数えてかについてです。1872 年（明治 5 年）の本学開設以来、様々な本学関係のアカデミックな内容のあるいはコミュニケーション中心の雑誌が出版されてきた。現在の京都府立医科大学雑誌は、森本ら（京都府立医科大学雑誌 100, 1991）によると、1897 年（明治 30 年）に創刊された校友会雑誌（図 1）に端を発し、途中 1927 年（昭和 2 年）に純学術誌としての京都府立医科大学雑誌（図 2）となり今日に至っている。整理しておかなければならないのは、1927 年（昭和 2 年）の時、巻は 1 巻としたが、号は校友会雑誌からの通号

とし 104 号としたため、巻と号が一致しないまま今日に至っていることである。もちろん、今回の 1000 号は校友会雑誌からの通号によるものである。

京都府立医科大学百年史によると、この明治 30 年に発行された 1 号や昭和 2 年の第 1 巻の発行には、発行すべきバックグラウンドがあったようである。1897 年（明治 30 年）の校友会雑誌の創刊は、医学校として第 1 回卒業生 12 名が巢立つとともに浄土寺誓願寺にて第 1 回解剖体大法会をおこなわれる（1884 年、明治 16 年）、療病院と医学校の間の垣根が取り払われる（1885 年、明治 17 年）など、療病院・医学校における医学教育が軌道に乗り、1887 年（明治 19 年）に行われた明治政府による医学校整理

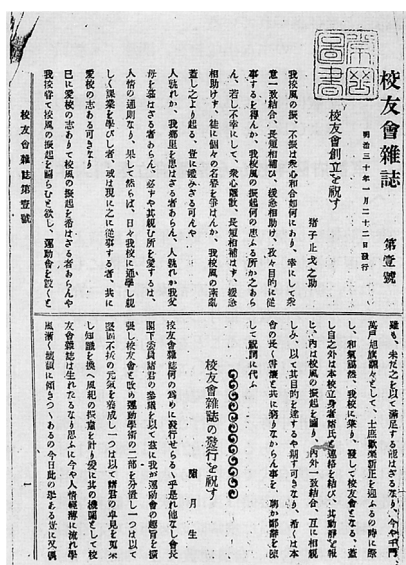
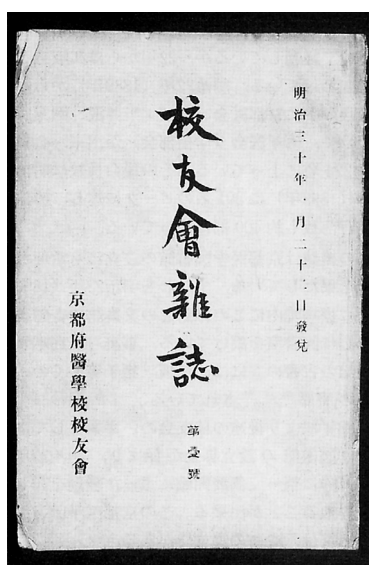


図 1



図2

(府県立 23 校が 3 校に減少)の危機も乗り越え、財政的基盤が固まってきた時期である。また、大日本帝国憲法の発布 (1889 年, 明治 21 年) や金本位制の実施 (1897 年, 明治 30 年) など国としても一人前になってきた時期とも一致している。

また、昭和 2 年の 1 巻 (104 号) が発行される前には、大学令の公布 (1918 年, 大正 7 年) があつた。これにより、帝国大学以外にも公立私立大学や単科大学の設立が認められ、1921 年 (大正 10 年) に京都府立医学専門学校は昇格し京都府立医科大学となった。ただ、昇格だけでなく、学術研究の面で大学にふさわしい環境が必要として、その後予科校舎・花園分院の完成 (1922 年, 大正 11 年) や学位授与権が認められたため毎月一回の学術集談会が組織された (1923 年, 大正 12 年, 関東大震災の年)。そして、1927 年 (昭和 2 年) に、大学初の純粋の学術雑誌である京都府立医科大学雑誌発行を目的

本誌發刊ノ辭

本學ノ前身京都醫學校ノ開設セラレタルハ、明治維新ノ男頭ニ屬シ其遺囑ニ基テ速ク、既ニ星霜ヲ閱スルコト六十餘年、此間幾多ノ變遷改革ヲ經タリト雖、其趣旨ハ一貫シテ西洋醫學ノ普及及啓蒙ニ力メ、本邦醫學ノ獨立ニ盡瘁シ、其貢獻シタル所頗ル偉大ナルヲ信ズ。今や世界大戰ノ勃發以來歲ヲ閱スルコト正二十有三、此間我國ニ於ケル醫學ノ進歩ハ實ニ驚異ニ値ス可ク、歐々乎トシテ其窮極ニ至ル所ヲ知ラズ、其業學ノ較著ナルコト、復々彼所請委西先進ノ諸國ニ比シ、敢テ軒輊アルヲ認メズ、唯憾ラクハ之ヲ發表スルニ當リ、此ガ機關ノ整備ニ於テ、我ハ彼等ニ一籌ヲ輸セザルヲ得ズ、嗟呼是洵ニ本邦醫學ノ一大憾事ナリ。

凡ソ學術ハ其研究旺盛ナルモ、其發表機關ニシテ備ラザレバ、又健全ナル發達ハ得テ之ヲ望ムベカラズ、而シテ研鑽獨々精ニ、其檢討則々密ナルニ至レバ、此ガ發表機關ニ益々純學術的ナルヲ要スベシ。本學ガ階級以來銳意諸般ノ施設改善ト内容充實トニ腐心シ、臨時モ時勢ノ進退ニ後レザランコト之レカク、篤ニ大學タルノ使命ヲ尊重シ進ア研究科ノ振興ニ達意シ、之ガ完全ナル發達ヲ冀望シ、以テ學術ノ進歩ヲ極メントコトヲ期セリ。逐日篤學ノ士篤ヲ負テ母學研究至ヲ訪ヒ、贊ヲ薦メルモノ頗ル多キヲ加フルニ至ル、之ガ指導ニ任ズル教授モ奮勵勉大ニ研鑽ノ實ヲ獎リ、アリ、從テ各教至ヨリ發表セラル、精研ナル業績ハ、日ニ月ニ多キヲ加ヘタルハ、誠ニ本學ノ爲ニ將又本邦醫學ノ爲ニ慶欣ニ耐ヘザル所ナリ。

然ニ爾來本學ニ於テ之ガ發表機關ヲ缺キ、僅ニ學内ノ有識者ニ此點ヲ遺憾トシ、純學術雜誌ノ定期發刊ヲ翹望スルヤ時久シ、時恰モ曩ニ退職セラレタル前學長小川博士ハ其記念トシテ巨額ノ金圓ヲ、本學醫學基金ニ寄與セラレ、之ヲ以テ雜誌經營ヲ補助スレ、純學術雜誌ノ定期刊行ヲ慫慂セラレタリ。茲ニ於テ學内有志諸紳ノ本會ヲ創立セントコトヲ企圖シ直ニ議熟ス、次ニ學外有志ニ其意ノアル所ヲ齎シ贊同ヲ求メタルニ、悉ク双手ヲ舉テ協賛ノ意ヲ示サレタリ、仍テ發起人ノ定メ、設立ノ趣旨、會則、專業方針等ヲ樹テ、徹テ全學友並ニ本學緣故ノ關係諸君ニ寄テ其入會ヲ勸誘セシメ、母學ヲ熱愛シ學術ノ興隆ヲ希フ諸賢ノ後援ハ、期セシテ倉然ト聚リ、會員壹千以上ヲ算スルコトヲ得タリ、斯テ爾々本會ハ其創設ヲ告グ。依テ本會專業方針ノ要旨ニ基キ、本誌第壹卷第壹號ヲ發刊シテ、茲ニ世界學壇ノ舞臺ニ其活躍ヲ肆ニセント欲スルモノナリ。翼クバ昭和改元ノ初頭ニ於テ、多大ノ抱懷ト溼潤タル意氣ヲ以テ生レタル、本誌ノ前途洋々タル發達ト泰々タル隆昌ヲ祝願シテ止マザルモノナリ、聊カ本會創立ノ由來ト其趣旨ヲ記叙シテ本誌發刊ノ辭ト爲ス。云爾

本誌名題ハ多年學友會ヨリ發行サレタル雜誌名ヲ襲階シ、京都府立醫科大學雜誌 Miketlungen aus der medizinischen Akademie zu Kyoto. と稱ス。然ドモ發刊ノ趣旨ハ外觀、内容ハ純然更新シタル純學術雜誌ナリ、仍テ卷ノ終ノ第壹卷第壹號ト爲ス、サレド因縁久シキ前雜誌トノ進米ヲ絶ツハ、索引照合ニ不便多キヲ鑑ミ、特ニ通號ヲ附テ第百〇四號トス。更新セラレタル本誌發刊ニ係テハ前陳ノ如ク、前學長小川達五郎博士ニ負フ所甚大ナリ、特ニ本誌ヲ以テ同博士退職記念號ト爲シ、謹テ茲ニ敬意ヲ表ス。

昭和二年五月

京都府立醫科大學々術研究會創立委員

- 角 田 隆
- 常 岡 良 三
- 後 藤 基 幸
- 中 村 信 正
- 梅 原 信 正

図3

とした学術研究会が設立されたのである。このように、大学としての自覚・自負のひとつとして表れたのが、自らの研究発表の場として自らの雑誌を持つことである。このあたりの意気込みは、“本誌発刊の辞”（図3）にあらわれている。また、1925年（大正14年）には初めての学位授与者をだしたのであるが、その学位審査はきわめて厳しいものであったようである。

記念号では、山岸学長のほか、これまで本誌の編集委員長を経験された、佐野 豊名誉教授、森本武利名誉教授、今西二郎教授にご寄稿

いただいた。1000号という国内でも稀な号数を維持している京都府立医科大学雑誌の歴史を振り返るとともに、本年法人化という大きな機構改革の本学における意義について考える機会になれば幸いである。

尚、1000号を記念して、基礎医学舎1階ロビーの一角に本誌初期の巻・号を身近に見ていただけるよう書庫を設置することとなった。特に、学生諸君や若い研究者にもご覧いただき、我々の先達の本誌設立時の意気込みを感じ取っていただきたい。

<特集「京都府立医科大学雑誌通刊 1000 号発行記念」>

京都府立医大誌 1,000 号発刊を祝す

学 長 山 岸 久 一

明治 5 年 (1872 年) に東山の山麓に位置する粟田口青蓮院の境内に「療病院」として診療と医学・助産・看護教育を開始してから 25 年目の明治 30 年 1 月 22 日に、京都府立医科大学雑誌の第一号が、京都府立医学校「校友会雑誌」として発刊され、本号が通刊 1,000 号発行記念号として発刊されることに対しまして、心から慶賀の意を表します。誠にめでたいことです。永年に亘り医大誌発刊に御甚力頂きました皆様には心より敬意と御礼を申し上げます。

校友会雑誌第一号を見ますと、縦書き B5 版で、当時の学長 (校長) である猪子止戈之助 (いのこ しかのすけ) 外科部長をはじめとした 7 人の祝辞、12 編の論説、1 編の科学論文と 7 編の雑録から構成されており、読んでみますと、本学の歴史の重さを感じ、感無量のものがあります。やはり、大学雑誌は大切な歴史を語ってくれます。その意味で、通刊 1,000 号発行記念事業として、基礎医学学舎 1 階にガラス展示ブースを設置し、第 1 巻から数冊を順に展示し、本学の皆様にその歴史を目で見て頂くことに致しました。残りの全ての巻 1,000 号までは、基礎医学学舎三階の会議室に保存致しますので、9 月末以降に、皆様に本学の歴史を身をもって感じて頂けることと思います。

さて、大学で発行する雑誌が 1,000 号となるこの機に、「大学の役割」について振り返ってみたいと思います。

大学の第一の役割は、人材を育てる「教育」をすることであると同時に、「豊かな教養を身につけ、豊かな人間性を育む」場としての役割があります。殊に医学部 (医学科・看護学科) は、ヒトを対象にする学部であり、医学・看護学の専門分野と同時に一般教養を身につけさせ、豊かな教養人を育てる最終的な教育の場で

あるため、われわれ京都府立医科大学人はその目的を果たすべく、環境づくりに最大の力を注がなければなりません。

大学の第二の役割は、日本・世界を支える「学術研究」を行うことです。すなわち本学では、日本・世界を代表する医学・看護学研究者が育つべく、十分な研究環境を備えることは当然であります。それに加えて医工連携、薬学、福祉、食環境をも視野に入れたヘルスサイエンス系の研究もできる環境を整え、これらの学術を育む場 (ヘルスサイエンス系共同大学院) を造る必要があります。

ここで、個人に対する研究教育だけでなく、研究領域全体への研究教育という視点での<研究の伝承>について考えてみたい。現在まで、日本のどこの大学でも、講座単位で縦割りの研究体制が継続されてきたため、大学全体での研究の伝承に困難なところが多かったのですが、このことの反省に立って、本学での研究体制の在り方について考えていきたいと思ひます。

ひとつは、「大学院の在り方」について、社会人大学院を含め、木村研究部長を中心に見直し案を検討中であります。また、講座縦割りの研究のみであった事に対して、私が学長に就任した年、平成 18 年 (2006 年) の 10 月から、「研究開発センター」(センター長:木村 實教授)を創設して、講座横断的研究ユニットを造りました。現在 5 つのユニットが走っておりますが、今後全学に問いかけしてユニットを増加する予定でありますし、その実体化に向けて場所と研究費の割り当ても考慮しております。このような“かたち”で新たな研究領域別システムを造りつつありますが、今後も横のつながりを重要視した横断的研究システム造りに力を入れていきたいと考えています。

ふたつ目は、もう一步踏み込んで、基礎・臨床の枠を越えるのは勿論のこと、各講座（寄附講座も含め）の枠を越えた、しかも細かいテーマ別よりもっと大きなくくりでの領域別研究所（センター）を造り、大学全体としての「研究の伝承」をしていきたいと考えております。

こういった領域研究紹介、あるいはそれぞれの講座での研究報告を、京都府立医科大学雑誌に掲載して、どの講座でどういった研究が行われているかを全学の研究者に周知する中で、横断的研究を組み立てる方向を期待していますので、医大誌編集委員会でも企画をして頂ければ幸甚です。もちろん看護学科での研究報告もして頂き、大学全体で幅広い研究を進めて頂きたいと思っております。

さて、医学・看護学系大学の第三の役割は、臨床に強い医師・看護師を育て、住民に信頼される病院となるに充分な人材を輩出することにあります。その意味では、明治5年（1872年）に創設された本学は、地域住民の人々、寺院、開業医、花柳界の人々からの支援（寄附）を受けて設立され今年で136年の歴史を持つ大学であり、京都府民にとどまらず近隣の府県、さらには全国レベルで患者さんを診療している病院であります。本学および附属病院は、地方大学・その附属病院ではなく、全国レベルの大学・附属病院であることを自負しなければならないし、今後は世界の人達をも対象にする病院機能を持つべく、着々と準備を進めているところであります。

大学はいま、大きな変革期にあります。本年4月1日より、荒巻禎一理事長を中心とする一法人二大学のカタチで独立行政法人化をいたしました。法人化にあたってのキーワードは、①迅速性、②弾力性、そして③透明性であると、

荒巻理事長が就任の御挨拶で話された通り、この3つのキーワードの下に色々な新しい事の実行に当たり、迅速性という点から、3日、3週間、3ヶ月、3年（中期計画の半分の年）毎に「何が新しく変わったか？」と自問自答しながら歩んでいるところです。

しかしながら、本学は136年の歴史を背負う大学でありますので、「変えてはいけないもの」と「変えるべきもの」があります。この判断を確実にしながら、法人化して「夢のある大学」になった、と実感できる大学造りをしていきたいと思ひ、着々と準備を進めているところでありますが、これには全学の構成員全員の皆様方の絶大なる御協力無くしては成せるものではありません。何卒よろしくお願い致します。

いま、「大学の個性化、独自性」が強く求められています。京都府立医科大学のアイデンティティ造りに向かって、ひとこま、ひとこまを丹念に確認しつづけると同時に、その緻密なプログラムづくりとプロセスの充実化、成果の実体化に全力を傾けたく思います。

また、未来志向型思考に基づいて、絶えざる“大学文化創造への挑戦”を命題として、

1) 強い大学

2) 選ばれる病院

を目指して努力して参りたいと思ひます。

結びにあたり、京都府立医大誌通刊1,000号発行記念に際して心からの祝賀と、毎号毎号編集業務に御甚力いただいております、あるいはおりました現在および歴代の編集委員長をはじめとする各編集委員の先生方ならびに事務職の皆様方の絶大なる御努力に対しまして、深甚なる敬意と謝意を表し、今後1,500号、2,000号に向けての歴史が刻まれることを祈念して、私のお祝いの稿に代えさせていただきます。

<特集「京都府立医科大学雑誌通刊 1000 号発行記念」>

京府医大誌通刊 1000 号の発行を祝して

京都府立医科大学名誉教授 佐野 豊

1965 年春に停年を迎えられた第一病理学教授 荒木正哉先生の後を継いで、私が京都府立医科大学雑誌（以下、京府医大誌と略す）の編集・発行者に指名された。1979 年末、新たに正式の編集委員会が発足した機会に、編集責任者としての私の役割は免除されたが、発行者としては 1990 年に大学を退職するまで毎号の背に私の名が印刷された。25 年もの間、本誌と長い絆をもった私にとって、通刊 1000 号発行という素晴らしい区切りの時を迎えることは大きなよるこびであり、本誌の刊行に尽力されたすべての方々と共にこの感激を分かち合いたいと思う。

1921 年に本学が医学専門学校から医科大学への昇格を果たしたことを契機として、学内に大学独自の純粋な学術雑誌をもとうという気運が芽生えた。こうしてそれまで発行されてきた学友会雑誌の内容が一新され、1927 年京府医大誌第 1 巻 1 号が創刊された¹⁾。以来、本誌は 80 年を超える歩みをつづけてきたことになるが、顧みてその道程は必ずしも平坦ではなかった。この波瀾に富んだ歴史の中で、私が経験し、感じたいくつかの思い出を綴り、寄稿の責任を果たしたい。

啓発された業績

京府医大誌が創刊された当時は、わが国の医学関係の学術誌も乏しく、本学で審査される学位論文のほとんどがこの雑誌に掲載された。この事情は当時わが国にあった 16 の医学部・医科大学に共通していたので、それぞれの大学が発行している学術誌の質は、自校の研究水準の高さを示すバロメーターになっていた。

私が研究に携わりはじめた助手のころ、欧米の研究者の論文に Mitteilungen der

Medizinischen Akademie zu Kyoto という雑誌に載った業績がしばしば引用されていることを知った。そして、それらの著者が本学の病理学教室の角田 隆先生（荒木教授の前任、元学長、わが国の神経病理学の創始者の一人）の門下の方々であることに気付いた。ある日、私は荒木先生を教授室に訪ね、角田門下の先生方の論文別刷一式を取りまとめて私に頂けないかと申し出た。先生は教授室の北側の壁全面を覆うようにつくられた大きな書棚から、一部ずつ数多くの論文別刷を引き出され、全業績を若造の私に与えて下さった。この作業の間、当時、先生が教授室で飼っておられた犬がソファーに寝そべってわれわれの動きを眺めていたことも忘れられない。

角田先生ご指導の業績は充実した立派な内容をもつものが多かったが、中でも大正 10 年卒の侯野一郎²⁾、三宅川廉平³⁾ 両先生と、親子二代、三人の本学学長を輩出された中村一族の一人中村文雄先生⁴⁾（昭和 6 年卒）のグリア細胞に関する業績は、京府医大誌の誇れる論文であると思う。ドイツ語で発表された三先生の論文別刷は、若いころの私にとって宝であり、グリア細胞の鍍銀や染色に参考としたのみならず、いつの日かこれらの先生の論文に劣らない充実した仕事をしたいと心のよりどころにしていた。

戦中・戦後と大澤徹翁氏

雑誌の出版を長年月継続するためには、牽引車となるすぐれた編集者を必要とすることはいうまでもないが、情熱をもって編集者を支える裏方の存在はそれ以上に大切かもしれない。京府医大誌の編集と出版における陰の功労者の一人として、53 年もの歳月を京府医大誌とともに歩みつづけた大澤徹翁氏の名を挙げることに異

議を挟む学友は一人もいないと思う。

日中戦争は1941年に太平洋戦争に移行、拡大し、青壮年の男子のほとんどは戦場に駆り出されていった。大学は空洞化し、研究の灯は消えた。京府医大誌の編集と発行の責任者であった梅原信正教授（病理学）は1943年春停年退職され、後を引き継がれた赤野六郎教授（衛生学）も1944年12月に急逝された。物資窮乏の状況下であって雑誌の統廃合の気運が高まり、また一方で印刷紙も市場から姿を消しつつあった。1926年以来、中央図書館職員、府立医大書記という身分で採用された大澤氏は東奔西走し、雑誌の危機を救った。

終戦の年（1945年）大澤氏は退職したが、乞われてすぐに学術研究会の職員という不安定な身分で復職し、再び京府医大誌とともに歩むことになった。戦後、わが国の経済は一層悪化し、用紙の購入は至難のこととなった。しかも雑誌の内容は1号ずつ大阪に設置された連合国軍総司令部GHQ（General Headquarters）支部の検閲を受けなくてはならなかった。終戦の年にやむなく休刊になっただけで、あらゆる困難を克服して京府医大誌の出版が継続されたのはひとえに大澤氏の献身的な努力に負うところが大きい。

次項に述べるように、新たな大学院制度、換言すれば学位制度改革の過渡期に、大学は学位量産の異常ともいえる時期を迎えた。この間、大澤氏は京府医大誌に掲載されるすべて論文に目を通し、誤字、脱字の添削、誤植の訂正、不十分な引用文献の巻号ページの補筆などに寝食を忘れて活動した。強烈な個性と独特な主張をもち、僧職を副業とした大澤氏の思い出は、本誌100巻記念誌に駄文を草した⁵⁾。

学位濫造

1950年代は明治以来続いてきた教育制度が根本的に見直され、改められた混乱の10年になった。古い歴史をもつ大学に加え、多数の専門学校が新制大学として新たな一歩を踏み出すことになった。さらに学位制度も見直され、大学院博士課程を修了することが学位申請者に義

務付けられることになった。このような改革が審議されはじめたころから、全国の医学部・医科大学に学位取得を希望する多くの人が殺到しはじめた。

いろいろな事情で学位を取得していなかった医師、戦時中に軍医養成を目的に設立されていた臨時医専の卒業生、台湾、満州、朝鮮半島に存在した医学部・医専の卒業生、さらに多数の歯科医専の卒業生たちなどさまざまな人たちが学位審査権をもつ大学の、それも基礎医学教室に押し寄せた。われわれの大学もこの人たちに門戸を広げるため選科生、研究生、あるいは副手などの制度をもうけ、多くの博士号取得希望者を受け入れた。1955年前後には50人を超える教室員をもつ基礎医学教室がいくつも存在した。

3年間で主論文1編と、3～5編の参考論文を発表することが学位取得の慣習となっていたから、年間を通して量産される論文は膨大な数になった。その影響は当然京府医大誌に及び、年2巻分厚い雑誌の発行がつつけられた。いくつかの大学では学位取得にまつわる不祥事が起こり、新聞紙上をにぎわした。

旧制学位制度は新しい大学院制度の発足によって1960年を境に姿を消した。こうしてあたかも潮が引くように、基礎医学教室から人影が減り、一つの時代が幕を閉じた。

新たな時代

私が京府医大誌に関わりをもつようになったのは、学位濫造のほとぼりが冷め、約10年が過ぎたころからであった。科学用語は急速に英語に統一されるようになり、伝統を守ってきたフランスとドイツ語圏の学術誌も次々と英文誌に切り換えられていった。それぞれの学術誌の質が客観的に評価されるようになり、研究者は少しでもインパクトの強い雑誌に投稿することに意を用いるようになった。科学者の業績が論文掲載誌の質と数で点数化して評価される時代になって、オリジナルな研究成果を和文誌に発表する意義はなくなったと思われる。こうした時代の変化を反映して、長い間学位主論文を単著

に限ってきた制約も外され、共著者の一人になっている論文も審査の対象にできるようになった。

大学院制度が確立された今日、「一定以上の学術能力があると認定された者に授与される称号」(広辞苑)としての学位を得るためにつくられる論文と、科学の発展に寄与する先端的な論文とは分離して考えなくてはならないと思われる。本学の医師に研究業績の発表の場を与えようとして発刊された京府医大誌の使命は終わったといえる。

私の中学生時代の恩師は、本のことを「お書

物」と言われ、部厚い本を枕にして寝ることなどもってのほかだと諭された。この先生に感化されて、私も本を大切に扱ってきたが、いつのころからか増えつづける雑誌をあっさり屑籠に捨てるようになっていく。

最近の京府医大誌を読むと、編集委員の方々はその内容に随分頭を使い、苦勞しておられることがよくわかる。後期高齢者の仲間入りしている私に名案が浮かぶはずもなく、ただただ委員の方々のご努力によって京府医大誌が学友たちの誇れる雑誌として存続、発展することを期待している。

文 献

- 1) 森本武利, 奥村美都子, 上野頼昭. 京都府立医科大学雑誌の歩み. 京府医大誌 1991; 100: 937-952.
- 2) Matano I. Beiträge zur Histopathologie der Neuroglia. Mitteil Med Akad Kyoto 1929; 3: 86-130.
- 3) Miyagawa R. Studien über die Hortegaschen Zellen. Mitteil Med Akad Kyoto 1933; 9: 217-244, 499-518 u. 1934; 11: 99-147.
- 4) Nakamura F. Histopathologie der verschiedenen Neurogliaarten mit besonderer Berücksichtigung der Nervenfasern. Mitteil Med Akad Kyoto. 1936; 18: 259-316. 705-759. 1207-1235. u 1937; 19: 705-744.
- 5) 佐野 豊. 京府医大誌発刊 100 巻記念にあたって. 付記 大澤徹翁をしのんで. 京府医大誌 1991; 100: 851-853.

<特集「京都府立医科大学雑誌通刊 1000 号発行記念」>

アーカイブスとしての京都府立医科大学雑誌

京都府立医科大学名誉教授 森本 武利

はじめに

京都府立医科大学雑誌が明治 30 年以來 110 年の歴史を重ねて、1,000 号の歴史を記録してきた。まずその歴史を概観するとともに、京都府立医科大学雑誌のアーカイブスとしての意義、アーカイブスの現状、日本政府による公文書管理法制定化の動きなどとともに、今後の本学でのアーカイブスについて考えてみたい。

アーカイブスは古記録、歴史資料ないしは記録（以上いずれも複数形）、公文書保存館、歴史資料館などの意味を持つ。ここではこれらの意味を含めてアーカイブスを使いたい。

医大誌 110 年のあゆみ

京都療病院創立以来、今日までの本学での出版物としては療病院新聞（1872（明治 5）年、4 号まで）、療病院日講録（1873（明治 6）年～1874（明治 7）年、号数不詳）、西医雑報（1876（明治 9）年～1877（明治 10）年、13 号まで）、療病院雑誌（1879（明治 12）年～1881（明治 14）年、25 号まで）、京都医事雑誌（1885（明治 18）年～1887（明治 20）年、26 号まで）、京都医学会雑誌（1888（明治 21）年～1901（明治 34）年、162 号まで）など、少なくとも 230 編が出版されている。

1896（明治 29）年に校友会が発足、その構成員は職員、卒業生、及び生徒で、目的は「相互の知識を交換し、体力を練り、徳義を養い、以て校風を振起、同窓の和親を謀る」としている。翌年の 1897（明治 30）年にはその機関誌として校友会雑誌の第 1 号が刊行され、総説、医学論文および雑報から構成されている。それ以来雑誌名は校友会雑誌、京都府立医科大学校友会雑誌と名称が変更された。

1923（大正 12）年には学位授与権の承認にもなって学内に学術集談会が発足し、京都府立医科大学学友会雑誌は同年 9 月発行の第 94 号からタイトルを京都府立医科大学雑誌と改題し、その 100 号（1925（大正 14 年 4 月発行）は第百号記念増大号として発行した。1927（昭和 2）年には通巻 104 号を純医学雑誌に衣替えし京都府立医科大学雑誌の第 1 巻 1 号とし、それ以降巻・号を用いるとともに、校友会雑誌からの通巻号数を併記してきた。

この際学術論文以外は学内広報、学生関係の記事は、京都府立医科大学学友会、学内付録、京都府立医科大学学内時報と名前を変え昭和 3 年まで発行され、1928（昭和 3）年には京都府立医科大学新聞に受け継がれた。

また同窓会に関しては、京都府立医科大学学友会通信（1950～1954（昭和 25～29）年）、青蓮会報（1970（昭和 45 年）以降）に受け継がれている。

第 2 次世界大戦末期の 1945（昭和 20 年）には印刷用紙の配給の遅延などにより発行が出来なかったが、この年以外の 110 年間、号を重ねて 1,000 号が刊行されたことになる。この経過を表にしたものを、前報より引用して示した¹⁾。

この間の京都府立医科大学雑誌およびその他の出版物を通覧すると、医学・医療の進歩に止まらず、京都府立医科大学、医学教育制度の変遷、人事異動、学生生活の移り変わりなどを追うことが出来る。

アーカイブスの意義

ベルリンの壁が崩壊して数年後、コペンハーゲンでの学会に出席した後、京都療病院 3 代目のお雇い医師、Scheube 氏の墓参を計画し、Leipzig 大学のおよび Scheube 氏終焉の町、

Greizを訪れた。その際 Leipzig 大学では、大学図書館および資料館 (Universitätsarchiv) から Scheube 氏の業績、所蔵著書のリストとともに、日本からの帰国後 1882 (明治 15) 年に Leipzig 大学へ提出された講師への採用申請書、講師への採用を決めた教授による評価結果など約 10 点の史料が得られた。

Greiz の町は現在でも人口約 10 万の小都市であるが、大学院学生が州政府文書館に週 2 日勤務していて、彼から Scheube 氏が 1889 (明治 22) 年から亡くなる 1923 (大正 12) 年まで住んだ家の住所と地図、侯爵家の侍医、保健所の医官、裁判医としての活動を示す書類、新聞 Greizer Zeitung に掲載された死亡記事と追悼文などのコピーの提供を受けた。

東ドイツに位置した Leipzig 大学において、また小都市 Greiz において 1 世紀前の史料が残されているのみならず、公開可能な形で管理されていることに感銘を受けた。

このようなヨーロッパにおけるアーカイブスは、フランス革命後に設置されたフランス国立中央文書館が始まりと言われ、ヨーロッパでは各都市に公文書館が置かれ、歴史的な文書を管理しているとのことである²⁾。

London の Science Museum 4 階には医学史の展示があり、Junker's Inhaler (本学初代のお雇い医師ヨンケルによるエーテル吸入器) が、ジェンナーが種痘に用いたメス、パストウールの使った実験装置などと共に展示されている。

一方日本では、1959 (昭和 34) 年に山口県文書館が日本最初の公文書館として、また 2 番目の公文書館として 1963 (昭和 38) 年に京都府立総合資料館が設立されている。京都府立総合資料館所蔵品のうち、1867 (慶応 3) 年から 1946 (昭和 21) 年までの行政文書約 1 万 5 千点は、2002 (平成 14) 年に国の重要文化財に指定されている。

日本政府では、国立公文書館 (1971 (昭和 46)

雑 誌 名		巻 数	号 数	発行年	西 暦	発 行 所
和 文	欧 文					
校友会雑誌			1 ~ 26	明治30年~ 明治35年	1897~ 1902	京都府医学校 校友会
			27 ~ 30	明治35年~ 明治36年	1902~ 1903	京都府立医学校 校友会
			31 ~ 90	明治36年~ 大正10年	1903~ 1921	京都府立医学 専門学校校友会
			91	大正11年	1922	京都府立医科 大学校友会
学友会雑誌			92			
京都府立医科 大学学友会雑誌			93	大正12年	1923	京都府立医科 大学学友会
京都府立医科 大学雑誌			94~103	大正12年~ 大正15年	1923~ 1926	
京都府立医科 大学論文集	Mitteilungen aus der Medizinischen Akademie zu Kioto	1 ~ 40	104~271	昭和2年~ 昭和19年	1927~ 1944	
京都府立医科 大学雑誌	Journal of Kyoto Prefectural Medical University	41 (原著編)	272~277	昭和19年	1944	京都府立医科 大学学術研究会
		41(抄録編) ~47(3号)	272~306	昭和19年~ 昭和25年	1944~ 1950	
		47(4号) ~75	307~498	昭和25年~ 昭和41年	1950~ 1966	
		76 ~97(3号)	499~753	昭和42年~ 昭和63年	1967~ 1988	京都府立医科 大学医学会
	Journal of Kyoto Prefectural University of Medicine	97(4号) ~	754~	昭和63年~	1988~	京都府医学振興 会

(注) 発行所名は原本の表記による。

京都府医学校は明治34年(1901年)9月京都府立医学校に移行。

京都府立医科大学医学会は昭和61年(1986年)3月財団法人京都府医学振興会に移行。

表1 京都府立医科大学雑誌 1,000号のあゆみ
文献1より引用。

年開設)のほか、5つのアーカイブスがあるのみで、社会保険庁の年金記録の不明問題を含め、公文書保管に関する意識が問われている。現在日本政府では「公文書管理のあり方等に関する有識者会議」により公文書の管理に関する討議を進め、来年度には「公文書管理法」の法案成立を目指しているとのことである³⁾。

本学のアーカイブス

本学の歴史資料に関しては、京都府立医科大学八十年史に京都府立医科大学史料室保管史料リストがある⁴⁾。また百周年記念誌の編纂に際して多くの史料が集められ、その一部がマイクロフィッシュとして保存されている⁵⁾。しかしその後資料室、図書館の移転にともない、その所在が不明となったものも少なく無い。その後京都府立医科大学創立 125 周年記念事業の一環として、「創立百二十五周年記念誌」が編纂され、この中に各種の資料を収録した。また「京都府立医科大学附属図書館古医書目録」を編纂することが出来た。同時に現存する八十年史および百周年記念誌の編纂に際して収集された資料のうち、資料番号を付すことのできた資料を「京都府立医科大学所蔵現存資料仮目録」として記録した。また前社会科学教室教授の新村拓先生により、多くの資料を整理頂き、ファイルの形で保存されている。

前項で述べた「公文書管理法」の法案が成立すると、公文書も今後保管の対象として検討が必要となってこよう⁶⁾。

本学にも他の公的機関同様、「京都府立医科大学文書分類及び文書保存年数に関する規程」が 1987 (昭和 62) 年に定められている。これによると人事記録、教授会記録、学籍簿など一部を除いて、保存年数が 1, 5, 10, 20 年に分類され、この期間が過ぎると廃棄される。かつては永年保存されていた診療録、レントゲンフィルムも現在では 5 年保存と規程されている。スペースの問題から避けられない点もあったが、電子記録化が可能となった現在、文書保存年数の見直しも必要であろう。

最後に本学にとって特に重要なことは、135 年の歴史を持つ本学に蓄えられた資料の重要性を認識し、その保管と閲覧を可能にすることであろう。本学の 135 年の資料がしかるべく整理されれば、重要文化財の価値があることは、京都府立資料館の例でも明らかである。しかし資料の管理には多忙な図書館員の協力を得ているのが現状である。また残された未整理の資料の目録作成や、電子資料化の仕事も残されている。

資料の整理にはそれなりのノウハウも必要である。それに加えてその資料の必要性や意義を判断するためにも、2 次資料としての医大誌の役割がある。

医学・医療の目まぐるしい進歩と変遷の中にあつて、京都府立医科大学雑誌が 1,000 号を迎えたことを機会に、そのアーカイブスとしての重要性をも再確認したいものである。

文 献

- 1) 森本武利, 奥村美都子, 上野頼昭. 京都府立医科大学雑誌のあゆみ. 京都府立医科大学雑誌 1991; 100 (10): 937-952.
- 2) <http://ja.wikipedia.org/wiki/アーカイブ> (2008.8.1).
- 3) 日本経済新聞. 2008 年 7 月 5 日, 文化欄.
- 4) 京都府立医科大学創立八十年周年記念事業委員会. 京都府立医科大学八十年史. 巻末記録, 1955.
- 5) 京都府立医科大学百年史編集委員会. 京都府立医科大学百年史. 1974; 678.
- 6) 松岡資明. 日本のアーカイブズとその未来. 本郷 (吉川弘文館広報誌) 2008; 73: 12-14.

<特集「京都府立医科大学雑誌通刊 1000 号発行記念」>

京都府立医科大学雑誌 1000 号記念特集を祝す

京都府立医科大学大学院
医学研究科 免疫・微生物学 今西二郎

はじめに

京都府立医科大学は、皆様よくご存じのように、1872年（明治5年）に京都療病院の設立により誕生しました。その25年後の1897年（明治30年）には、京都府立医科大学雑誌の元となる「京都府医学校友会雑誌」が、発行されました。その後、「京都府医学校友会雑誌」が、「学友会雑誌」と名称を変え、さらに「京都府立医科大学学友会雑誌」を経て、1923年（大正12年）に「京都府立医科大学雑誌」が発行されるに至りました。本号は、最初の校友会雑誌からちょうど1000号となる記念すべき号となりました。

これも伝統あるわが校ならではの喜びであると思います。

編集委員長としての9年間

私と京都府立医科大学雑誌とのかわりには長く、森本武利名誉教授が、編集委員長を務めておられた間、何時からかは、定かではありませんが、編集委員として、参画させていただいたときから始まります。記録によれば、昭和61年（1986年）には、すでに編集委員を拝命していますので、本年3月末まで、少なくとも22年間、関与させていただけたこととなります。

また森本委員長在任の途中からは、副編集委員長となり、委員長のご指導下で、いろいろ教えていただきました。おかげさまで、1999年（平成11年）に森本委員長より、編集委員長を引き継いだときも、それほどまどうことなく、責を果たすことができたかと思えます。

とはいっても、京都府立医科大学雑誌の編集で大きな変革はいくつかありました。

まずあげられるのが、投稿論文数の激減で

す。それまでの京都府立医科大学雑誌は、学位論文の掲載誌としての役割を果たしていました。すなわち、本学で取得する学位論文のほとんどが、京都府立医科大学雑誌に掲載されました。平均して年間100近くあったかと思われます。また、学位と関係なくても、積極的に論文を投稿していただけることも結構多かったのです。したがって、京都府立医科大学雑誌としての採算はほぼ合っていたように思えます。

しかしながら、時代の流れで、まず学位論文が、できるだけ英文誌、それもインパクトファクターのついている英文誌に掲載されることが推奨されるようになったことが、京都府立医科大学雑誌のあり方の根幹にかかわる問題になってきました。以前の学位論文は、単著を原則としていました。したがって、多くの場合共著となる英文誌は、学位論文としては、多少、難しかったです。それが、インパクトファクターの付いている英文誌なら、共著でもよいということになり、一挙に学位論文が英文誌に流れたのです。

このこと自体は、大学にとって悪いことではなく、研究の質の向上に大いに貢献したのですが、京都府立医科大学雑誌にとっては、学位論文数が激減するという結果に見舞われたのです。

また、学位以外の論文も同様に、少しでもインパクトファクターの高い英文誌の掲載を目指さようになっていきました。

このような大きな変化の中で、京都府立医科大学雑誌をどのように位置づけるか、編集委員会の中で喧々諤々と意見が交わされました。その結果、多くの方に興味を持っていただけるような総説を増やしたり、特集号を組んだり、気軽に読める医学フォーラム欄、情報交換の場と

して、教室、臨床部門の紹介、関連病院の紹介、学会・研究会の案内や研究会の抄録掲載など、いろいろな記事を掲載することで、多くの方々に興味を持っていただけるよう工夫と努力を重ねてきました。このような企画をするにあたっては、編集委員の先生方の熱心な議論と事務局の方々の助力を得て、はじめて成しえたものがあります。そして、何とか私が編集委員長を退任する本年3月まで持ちこたえたわけです。

ここに改めて、編集委員の諸先生方ならびに事務局の方々に感謝いたします（表1）。

今後の京都府立医科大学雑誌に期待する

以上のような経過で、かろうじて京都府立医科大学雑誌を存続させることしかできなかった私ですが、後任として高松哲郎教授に委員長を引き受けていただくことになりました。

私が編集委員長の時にはできなかったオンラインジャーナル化やその他のいくつかの問題に取り組んでいかれることと思います。そして、ますます京都府立医科大学雑誌が皆様方をひきつけるような魅力あるものにしていかれることと期待しています。

1000号続いた雑誌です。2000号、3000号へとさらに発展していくことを祈念致します。